太陽王と月姫

行見　八雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
太陽王と月姫

【Ｎコード】
Ｎ４６７４Ｚ

【作者名】
行見　八雲

【あらすじ】
世界を支えていた神獣が眠りに就き、徐々に滅びへと向かって行く世界で、王は神殿側と協力して、神獣を目覚めさせることの出来る存在である月姫を異世界から召喚した。
しかし、月姫が神殿で遊興している間に、神獣が次々と目覚め出したのだ。
その原因が分からず、王は困惑していたのだが、やがてその理由が明らかに――というお話です。

太陽王の疑問・1（前書き）

書けるうちに書きたいものを書いておこうと思い、他のお話の更新が滞っているにもかかわらず、書いてしまいましたm（＿；）m

ベタでベタなお話が読みたかったので、自分でもベタでベタなお話を書こうと思ったのですが、途中で方向性を見失ってしまい……orz

しかも、中途半端なところで終わりますが、どうぞ広い心でお許し頂けると助かります＜（＿）＞

太陽王の疑問・1

「陛下、これは……」
「ああ……いったい、どういうことだ」

年期を感じさせる剛堅そうな執務机の上に、広げられた大陸の地図。その地図に、ここ数週間のうちに間を置かずに記されていく丸印に、この国の宰相が戸惑ったような声を上げ、それにこの国の王が眉間に皺を寄せたまま頷いた。

ここは、地球とは異なる次元に存在する世界。この世界は現在、徐々に滅びの道へと向かっていた。

この世界は、太陽王と月姫という夫婦の神によって創られ、彼らの意を受けた光・闇・地・風・火・水の六神獣によって支えられてきた。

しかし、世界の秩序を保つために力を尽くしてきた神獣達の力は、時を経るにつれ徐々に衰えていき、やがて力を使い果たした神獣達が、ここ数百年にわたり、一体、また一体と自らの神殿に置かれている神玉の中で眠りに就くようになった。

そして、神獣の力が失われたことにより、世界は徐々にバランスを崩していき、緑は失われ、大地の実りは減り、雨が降らなかったり、気紛れに豪雨をもたらしたり、所々で嵐が起きたりと不順が多くなった。また、気候も急に暑くなったり寒くなったりと巡りが崩

れ、海洋や作物、生きもの達の生活に大きな打撃をもたらしていた。

ついに最後まで残っていた闇の神獣までもが眠りに就いたとの報せがもたらされてから早数十年、人々は確実に世界の終わりをその身に感じ取っていた。

だがしかし、創造神の残した石碑の中に、救いの記述が残されていたのだ。

その内容とは、異世界にいる月姫を呼び戻し、姫により神獣へ力を与えてもらうというものだった。

月姫とは夫婦の創造神の片割れであり、伴侶である。

無であったこの世界に太陽王と月姫が舞い降り、太陽王が世界を創って、月姫が神獣を生み出して世界を調えたとされている。その為、力を失った神獣に再び力を与えることができるのは、異世界で力を蓄えながら転生を繰り返す月姫のみであると記されていたのだ。

そこで人々は古の文献を漁り、約千数百年前にも月姫を異世界から招いたという記述を発見した。そして、その方法も。

王と神殿の協力のもと、召喚の儀は行われ、無事に一人の女性を異世界から召喚することに成功した。ただ、召喚先が、予定では神殿内の祭壇の前であったはずが、城近くの森の中に召喚されてしまったというハプニングも生じたが。

召喚された女性は、マイア・シンドウといい、波うつ艶やかな亜麻色の髪の美しい女性であった。言葉は通じなかったが、魔術師の術によって話せるようになり、事情の説明もしたうえで、その役割を承諾してくれることになった。

けれど、彼女はまだこの世界に不慣れなため、世界に馴染んでもらう必要があるとの神殿側からの要望により、それぞれの神獣の眠る神殿への旅立ちは先延ばしにされていたが。

神獣の眠る神殿は、世界の中央に位置する大陸全土を治める聖王国エイクレイデアの首都エイクエートスを囲むように、大陸の東西南北に風地火水の神殿が建てられている。そして、聖王国王都の大神殿に光の神獣が眠っているのだが、ただ闇の神獣の眠る闇の神殿の所在だけは、誰も知らず、また古の文献にも記されてはいなかった。

しかし、異世界からマイアを召喚してから、一月ほど経った頃、大陸の東の端の風の神殿から連絡があった。風の神獣が目覚めたのだと。しかも、神殿に勤める神官達が気づかぬうちに、眠りから覚めていたというのだ。

この報せは、事情を知る王とその側近、そして神殿側にも大きな驚きをもたらした。何故ならば、月姫マイアは未だに王都の大神殿におり、風の神殿には訪れてはいなかったからだ。

確認の者を遣ったところ、確かに風の神獣は力を取り戻しており、誰もが事態を飲み込めずにいたが、やがて大神殿の誰かが、月姫がこの世界におられるだけで神獣に力を与えるのだと言い出した。

そのような話は聞いたことが無く、また前回召喚された月姫は各神殿を回ったとの記録が残されていたのだが、しかし誰もその説に反論できる者はおらず、それでその場は収まったのだ。

それからまた一週間近く過ぎた頃、続いて火の神殿から、火の神獣が蘇ったとの報せが届いた。そして、そのまた数日後には地の神

獣が目を覚ましたと。

神殿の方では、さすが月姫だとマイアをもてはやす者が多くなったが、王やその側近達は違和感を感じていた。

というのも、神獣の目覚めの順番と、その目覚めの間隔からいって、何者かが移動しながらことを行っていると考えられたからだ。しかも、神獣が蘇ったと思われるのは、深夜や明け方など、人目に付かない時間帯であり、案の定神獣が目を覚ます瞬間を見た者はいなかった。

これらは単なる偶然にすぎないのか。それとも、月姫マイアでない何者かが、神獣に力を与えて回っているのだろうか。しかし、それは可能なのだろうか。可能だとするならば、いったい誰がどうやって行っているのか。なぜ、人目に付かないように行っているのか。

さらに、謎はまだあった。それは、各神殿は大陸の端にあるため、その間にはかなりの距離がある。けれど、神獣の目覚めの間隔はそれほど開いてはいない。馬や馬車のような普通の移動手段では、どうやっても移動できない日数なのだ。それを、どのようにして移動しているのか。

やはり神獣の目覚めの順番は偶然で、月姫がこの世界にいるというだけで、神獣は目覚めるのか。しかし、ならば何故一番近くにいる光の聖獣は目覚めないのか。

多くの謎が残ったままであったが、少しでも事実を突き止めようと、王は残る水と光の神殿の監視の強化を命じた。

神獣を目覚めさせている者がいるのならば、その者の行為を邪魔することなく、ただそれがどのように行われているのかを確かめるように、と。

そんな中、監視をさせていた者から、水の神獣が蘇ったとの報告が届いた。

しかし、水の神獣はどうやら深夜に目覚めたようなのだが、それがどのようになされたのかは、やはり分からなかったというのだ。何故ならば、監視者や警護の者達すべてが、その時間帯に眠ってしまっていたからだと。

だが、これは奇妙なことだった。監視者と警護をする者を合わせれば、十数人の者達が神殿内やその付近にいたらしい。その全員が、しかも深夜の警護に慣れた者達で、さらに順番に仮眠をとり体調も万全であったにも関わらず、いっせいに寝てしまうものだろうか。

神獣が自ら蘇る姿を見せないようにしたのではないかとの意見も上がったが、それは即座に否定された。古の文献にも神獣がそのようなことをしたという記録は無かったし、何より水の神獣に人を眠らせる力は無いと言われているからだ。

そうして、全く事態のつかめないまま、残されたのは光と闇の聖獣のみとなった。

太陽王の疑問・2

執務机に広げられた地図には、蘇った風地火水の神獣の神殿に丸印が描かれていた。その地図を眺めながら、王はとりあえず王都の大神殿の監視を強化するように指示する。

神獣を目覚めさせる行為は世界の救いになることであり、現に蘇った神獣の影響で、気温や天候は元のように安定するようになってきている。農作物の実りや、森林の減少、砂漠化への影響は、もうしばらく待たなければはっきりとした状況は分からないだろう。けれど、確実に世界は救われようとしているのだ。

神獣を蘇らせてくれていることは、ありがたいことには変わりはないが、それでもその原因がつかめないというのは落ち着かないものがあり、また今後の対策のとりようもなかった。

「陛下、月姫様からお茶会への招待状が届いております」

そう言って差し出された封筒に、聖王国エイクレイデアの現王リーフリッドは眉根を寄せた。

王の頭を悩ませている現状のもう一つが、これである。

古くから伝わる伝承では、世界を創った太陽王と月姫は、共に地上に降りてこの聖王国を建国し、太陽王が初代国王に、月姫が王妃の座に就いたとされている。そして、月姫が異世界で輪廻を繰り返すように、太陽王も聖王国エイクレイデアの王族のなかに生まれ変わると言われている。現に、前回月姫が召喚された際に、王位につ

いていたのが太陽王の生まれ変わりであり、二人は再び夫婦となったとされる。
太陽王の特徴は、その歴代王の中でもずば抜けて強い魔力であると言われているが、太陽王であることを決定づけるのが、月姫との関係なのだという。なんでも、太陽王と月姫は、一目まみえるだけで恋に落ち、どのような状況にあっても互いに惹かれあう運命にあるらしい。

話を聞くだけならば、そんなことがあり得るのかと疑わしく思えなくもなかったが、前回の月姫と太陽王も、召喚によって月姫が現れ、王と目を合わせた瞬間に、魂が引き合うように寄り添い、婚姻を交わし、死ぬまで深く愛し合い傍に居続けたのだという。まるで、離れ離れになった半身が一つになり、ようやく満たされているかのように。

その話を聞いたマイアは、リーフリッドが自分の夫になるのを当然だと思っているらしい。実際に、召喚され、自分を見つけ出したリーフリッドを見て、その場で恋に落ちたのだから、と。
しかし、リーフリッドはマイアに惹かれはしなかった。美しい女性だとは思ったが、愛おしいというような感情は沸かなかった。そのことは、宰相にしか告げてはいないが。

もしかしたら、自分は太陽王の生まれ変わりではないのかもしれないとも考えた。だが、リーフリッドは歴代のなかで、初代国王に並ぶと言われるほどの純粋で膨大な魔力の持ち主である。そして、現在確認されている範囲では、リーフリッドを超える魔力の持ち主は存在しない。
ならば、どこかに間違いが生じているのだろうか。それは、古くからの伝承にか、リーフリッドにか、それとも、月姫とされているマイアにか。

現在、マイアは大神殿に身を置き、神官や巫女達によって世話をされている。
こちらの都合で、無理矢理生まれた地から連れてきてしまったのだから、最大限の配慮をもって、何不自由ない衣食住を提供するのは当然だと、リーフリッドも考えている。その為には、多少の散財も、我が儘も構わないと。

しかし、こちらに来てしばらくしてからのマイアの行為は、少し度が過ぎているように思うことが多々あった。
しばしば商人を呼びつけては、大量のドレスを作らせ、宝石を買い漁り、派手な装飾品を身に着けた。身の回りは見目の良い神官に任せ、彼女に付いた巫女や下働きの女が粗相を犯せば手ひどく罰した。気に入らない者は、神殿の上層部の者に命じて神殿から追い出したことも何度かある。
そして、貴族等を呼びつけては、日々派手なお茶会や夜会を繰り広げている。何度か、リーフリッドも参加を求められたが、最初の頃に数回参加しただけで、後は仕事を理由に断っていた。

まるで女王にでもなったかのように振舞うマイアに、大神殿側は彼女を褒め称え擦り寄り、王の側近達は嫌悪し眉を顰めた。月姫だとすれば仕方がないが、彼女がこの国の王妃になることに不安を漏らす者も多くいる。
この派手な豪遊が、マイアが家族から引き離されてしまった寂しさを紛らわすためのものだとするならば、やがて収まるだろうと静観している状況ではあるが。

また、マイアがこの世界にやって来て一向に月姫としての役割を果たさなかったことも、王の側近達の不信を煽る要因の一つになっ

ていた。
　というのも、マイアがこの世界に来た時点で、世界は終焉に向かって、各地で巨大な竜巻が起こり、勢力の衰えない嵐によって民家や畑が流され、また干ばつや砂漠化が進行するなど、様々な自然災害に苦しめられていたのだ。呼び出して間もないうちに重要な役割を負わせることに、彼女には申し訳ないと思いつつも、せめてここにある光の神獣だけでも蘇らせて欲しいと頼んだ。
　しかし、彼女はそれを拒否し、その気にならないからと先延ばしにした。しばらく経っても、豪遊に耽ることにのめり込み、他の神殿へ向かうことも嫌がった。

　それでも、徐々に神獣は蘇っている。それが彼女の力によるものだというならば、我々は僅かにも彼女を疑ったことを謝罪し、月姫として敬意を払って接して行かなければならない。

　そう思いつつも、リーフリッドは手元にあるお茶会の招待状に目を落とした。
　色々と謎は多いが、今すべての神獣が目覚めつつある。にもかかわらず、彼女のこれほどまでの神獣達への無関心さは何故なのか。彼女に直接聞けば、この謎は明らかになるのだろうか。

　頭に、以前会った時の、豪奢な彼女の姿が過る。
　これが、半身に抱く想いなのか。ずっと語り継がれてきた太陽王と月姫の永遠で至高の愛。それは、こんなにも味気なく、無感動なものなのか。

　やはり俺は太陽王ではないのだろう。
　本当の太陽王が見つかったときの譲位の可能性も考えておかなければと、リーフリッドは深く息を吐いた。

太陽王の疑問・2（後書き）

召喚した側の事情なので、身勝手だと感じる方もいらっしゃるかもしれませんが……（；＾＿＾）ａ

太陽王の疑問・3

念のためにと、光の神獣のいる大神殿の監視と警備を強化してから、十日以上が経った。
今までの、風から火、火から土、土から水の各聖獣が蘇っていった日数から比較すると、今回は少し間隔が開いているようにも思われた。

そんなある夜更け、リーフリッドは妙な胸騒ぎを覚え、数人の護衛を付けて大神殿へと向かっていた。

その途中、もう深夜だというにもかかわらず、夜着のマイアに出くわした。
マイアが深夜に幾人かの貴族と密会をしているという報告は、リーフリッドのもとにも届いていた。恐らく会いに行く途中か、またはその帰りなのだろう。

思わぬリーフリッドとの遭遇に、彼女はひどく慌て、何やら言い訳をしていたようだったが、リーフリッドはそれに構わず大神殿へと足を進めた。そんなリーフリッドの後を、マイアが縋るように付いてきたが、リーフリッドは彼女に見向きもしなかった。

体の奥で、何かが騒いだ。早く早くと本能が急かす。

――ああ、やっと君が……。

正面からではなく、裏口を通って神殿内へと足を踏み入れた。石造りの通路を抜けその先の扉を開けば、光の神獣の神玉を祀ってある祭壇の脇へと繋がっていた。

「……っ、これは！？」

祭壇の間へと足を踏み入れたとき、そこに広がっていた光景に、リーフリッドの背後に控えていた騎士の一人が驚愕の声をあげる。

そこには、重なるように床に倒れ伏した、警備や監視のために置かれた兵士達の姿と。

祭壇の前に立つ、フードで顔を隠したマント姿の人物の足元を中心に、半径三メートルほどの魔法陣が浮かび上がり、そこから天井にかけて光の柱が立ち昇っていた。

渦を巻く様な光の柱の中を、目を凝らして見てみると、その人物はマントの裾をバタバタと揺らしながら、手に神玉を掲げているようだった。

静まり返った神殿内に、リン…リン…という軽快で厳かな鈴のような音が鳴り踊る。

やがて、その人物が手に持つ神玉が透明に透き通り、その上に白く輝く神獣の姿が浮かび上がった。それは、伝承にも語られ、また古の文献にも描かれていた光の神獣、大きな白い一対の翼を持った、体長二メートルほどの輝白の狼。

自分よりも僅かに上空に現れた神獣を見上げ、その人物が何かを話しているかのように口を動かすが、光の柱のせいかその声はリー

フリッドのもとへは届かなかった。
しかし、その人物の言葉に小さく頷き、そのあと深く頭を下げた神獣に、リーフリッドは驚きに目を瞠った。孤高で誇り高い神獣が頭を下げるその人物は、一体何者なのか。

その人物の足元の魔法陣がより一層の輝きを放ち、光の柱から零れる真っ白な光が神殿の壁や柱、精巧な細工の施された祭壇を照らし出す。その光の中心で、輪郭も淡く真白の光に覆われた大きな翼をもつ狼と、マントをはためかせながら凛と立つ人物は、まるで神話の一幕のように静謐で神々しく、リーフリッドやマイア、そして騎士達の誰もが声を飲み、その荘厳な光景に見入っていた。

やがて体の端の方からキラキラと光をまき散らしながら姿を消した神獣に続くように、光の柱は徐々に勢いを無くし、マントの人物の足元に浮かび上がっていた魔法陣も地面に溶けるように消えて行く。

途端に落ちたシンとした静寂の中、その人物が手にしていた神玉をそっと祭壇へと戻す。神獣が眠りに就いてからは、ただの丸い石のような灰色をしていた神玉は、今は透明な玉の中心から眩いほどの白い光を発し、まるで玉の中心に太陽を据えているかのように力強く輝いていた。

誰もが動くことも声を発することもできないまま、その人物の一挙一動をただ見守っていたとき。

「あ……あなた、何者なの！？」

突然叫ぶように発せられたマイアの声に、その人物は今初めて人

がいることに気が付いたかのようにびくりと肩を揺らし、慌てて顔をこちらに向けた。その様子に、リーフリッドは自然と高揚していく気持ちを感じていた。
残念ながら、その人物はフードを目深に被っているために、顔は見えなかったが、何やら慌てている様が伝わってくる。

ただじっと、その向こうは見えはしないが、その人物の目があるであろう場所を見つめていると、その人物はしばらく動きを止めた後、ばっと勢いよく顔を横に向けた。
そして、いつの間にか宙にふわふわと浮いていた六色の光を見上げると、「に、逃げよう！」と声を上げて、体を出入り口の方へ翻した。

そんなその人物の背中に、リーフリッドは妙な焦りを覚えた。
この人物は誰なのかとか、今の出来事は何だったのか等を、捕まえて問い詰めなければと考えるより先に、ただこの人を逃がしてはいけないと、その一心で声を上げた。

「待て！　逃げるな！」

その声に、その人物がピタリと動きを止める。

その様子に首を傾げながらも、騎士の制止も聞かず、その人の傍へと駆け寄った。
その人物が、妙に慌てながら宙に浮かぶ光に向かって何やら騒いでいたが、それに構わずぐっとその腕を掴む。
自分でも不思議なほど慎重に掴んだ腕はとても細く、それに驚くと共に、染み込むような安堵感が体に広がっていく。

腕をリーフリッドに掴まれたまま、まだここから逃れようとジタ

バタと騒ぐその人を、リーフリッドはぐっと腰を掴んで抱き寄せた。
そして、何やらピキンと固まってしまったその人物に構わず、そっと、だが素早くその人が被っていたフードを脱がせる。

はらりと、真っ黒で艶やかな髪がフードの中から零れた。天井から差し込む月明かりに照らされた顔は思ったよりも幼く、驚きにか大きく見開かれた漆黒の瞳に、リーフリッドは息を飲んだ。

じわりと腹の奥で熱が渦巻く。言いようのない飢餓感と狂おしいほどの恋情が全身を襲う。
これは自分のものだ。自分だけの。誰にも、触れさせはしない。
――ようやく、この手に戻ってきた……。

瞠られたままの美しい闇色の瞳にただ自分だけを映し込んで、こみ上げる昂揚感のままに、リーフリッドは笑みを浮かべた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4674z/

太陽王と月姫

2011年12月17日21時45分発行